

林寺報

「なんであんた、ほんとうに、おかあちゃんに似てたのー」「

ひきしふりに偶然会った従姉妹から、出  
会いがしらにそう言われたとき、わたしはおつ  
かなびっくり、何のことやら対応に戸惑つて  
しました。

母は、昭和十年の春に亡くなっていますから、今からいうともう七十年も昔の事なのであります。そのおかあちゃんに似てきたと言うのです。今になつてそんなことあるものかと言いたい所ですが、あながちそうとも言えないような気持ちもいたします。最近自分でもなんとなくそんな気がしないでもないのです。

母は、小女でしかも煤けた雰囲気の人でした。だからその人に似てきたと言われて、あまりうれしくはありません。ま、仕方のないことかと思いながら、反面、やつぱりこの親子、深い深い不思議な因縁によつて結ばれていたんだと、ドット懐かしさもつたいなさが胸に込み上げてまいりました。

そんなことがあって一月もたたぬ日に、その母の里の家に法事があつて久方ぶりにお参りに行ってまいりました。

住んでいる人の世代も代わり、建物のたたずまいもガラッと変わつてしまつていますが、それでも、幼い日、母につれられてきたころのことをあれこれ思い起こします。

母の父母。年老いた祖父祖母のころでありました。

母をふくめて祖父にも祖母にも、わたしは一度も甘えかされたことはなかつたようになります。

母にさえわたしはやさしく抱っこされた記憶はありません。まして祖父祖母から抱いたり頬擦りされたようなことは全くありません

父亡きあと、あのころの母も祖父母もみんな忙しくて、わたしの方むきではなくて、なにか違った方向を見つめて暮らしていたのではないかとおもいます。

ほとけさまの方向ばかり向いて暮らしていでのではないかとおもいます。

おじいちゃんお婆ちゃんは、私が行つたときにも、私なんかよりほとけさまにお参りばかりしておりました。

母も、わたしを祖父母に預けにその家に行

わたしをおいて帰って行つてしまひました。  
翌朝、母のもつてきた荷物のなかからホーロー引きの洗面器をだして井戸端で顔を洗つたとき、そこに例の「散る桜 残る桜も 散る桜」という歌が書いてあつたのを思い出します。（母は夫を亡くして三年後、苦難をかさねて死んでいきました）  
母は、それだけをのこして、私をおいて逃げるように帰つて行って仕舞いました。

「」の度の法事に、いつられた若いお坊さまの「」  
悔いる」となし  
「たとい身をもろもろの苦や毒のなかにお  
くとも、わが行、精進にして、忍んでついに  
法話。

(あなたを救うほとけになるためには、呼んで呼ぼうて働きかけて、たといこの身を苦難や毒の海に沈めても、忍び忍んで、ついに後悔することはないであろう) ～大無量寿經

母も祖父母も、先ず一人一人がほとけさまと向き合って、ほとけさまになつて、それで私に見向きもしないで、ほとけさまの方向を向いて生きていた。

それで、今でも、私のそばについていて、お念佛していくのだ。

報恩書

木扇の「構」は木を交互に組み合せて家を構築する形。言扇の「講」は、いろいろな人がいろいろな思いを語り合い聞き合って、よろこびを共有することです。蓮如さまは「寄り合い・談合」するなかで、「信心歎喜」することをお勧めになりました。

昔、寺のお講にはみんな本堂で泊まって語り合いました。家庭の報恩講には親戚村人寄せ来て来てご法座があり、思いのありつけを語り明かしたものでした。

何を話し合つたのでしょうか。

る」ことです。「恩」。「いのちをささえて  
いるもと」「わたしのこのいのち何に支えら  
れているのか」。それを振り返って見ること  
です。カタンニユイ。お釈迦さまの国のみ  
るい言葉です。(成されたものを知る)。や  
はり、私のいのち何によつて支えられている  
のかなと振り返ることです。

すぐに思い浮かぶのは、親の御恩です。そ  
れを含めて、無量のいのちと不思議な光りに  
頼られていたわたしであつたと知られます  
その「まことの喜び」(信心歡喜)に生き返  
る。往生淨土と言うのでしょうか。

忙しくなつて、すべて簡略になりました。  
しかし、忙しくなつたからといって「心」を  
「亡」へしては生きる意味はありません。  
一年に一度です。お寺の法座に逢つてくれ  
下さい。

みのりを聞く余定例法座  
にいふから各部落ごとの  
家庭報因愚講説が勤ま  
ります。

十六日	福成寺報恩講 青少年健全育成大会（ひまこーじゅう）
十七日	夜久野本光寺報恩講 朗読ボランティアあすなろ
二十一日	検診・幼稚園参観日
二十二日	報恩講
二十四日	正福寺報恩講 真覚寺報恩講 あすなる録音日 真覚寺報恩講
二十六日	瑞泉寺報恩講（→二十六日まで） 市場森友一周忌法事 出石役場

九日	瑞泉寺一周忌法事	三日	高福寺報恩講法座
八日	岸下 豊氏宅法事	四日	光顯寺報恩講法座
七日	同じ	五日	高福寺報恩講法座
六日	横山 守氏宅法事	三日	光顯寺報恩講
五日	平田專福寺一七回忌法事	二日	高福寺報恩講
四日	全国布教大会（和歌山鷺の森）	一日	高福寺報恩講法座
三日			
二日			
一日			

ある日のことです。

ほへらはみんな生きてごゆ  
生きてごるから歌つんだ  
ほへらはみんな生きてごゆ  
生きてごるから悲しくだ……

という歌が流れてきました。私は、その歌詞とメロディーの素晴らしさに、久しぶりに心が躍るように聞き入りました。この歌は早くから知られていたのでしょうか、歌に関心のない私には初めて耳にする歌でした。作詞が、やなせたかしさん、作曲はいづみたくさんで、「手のひらを太陽に」という歌でした。

れていますが、作詞のやなせたかしさんを知る人は少ないと思います。やなせたかしさんは作詞家ではなく、絵本作家だそうです。この歌は、やなせさんの不遇時代に生まれた歌だと、ある本に書いていました。この素晴らしい詩の生まれた経緯を簡単に書いてみます。いろいろと描いても売れないで、精魂尽きて絶望の中をさまよっていた時のことです。冬の寒い日でしたが、体を温める暖房器具がありません。そこで土方なく裏中電丁で冷たい手を暖

生きているから

中央仏教学院講師  
鎌田 宗雲



生きている。こんなことで生きる希望を見失うなんて、なんと小さいことに悩んでいるのだ。生きているがら、悲しみや苦しみがあるんだ。これを乗りこえれば、「喜びがあるんだ」と、心の底から生きていることを喜んだそうです。そして、自分を励ますために書いたのが、この歌詞だそうです。

私は後に、やなせさんの「めぐりあい」という詩に出会いました。

死にたいともあつたけれど  
生きていたからよかつたね  
一一一  
ふしみながりあい  
ふしみなめりあい  
一  
よかつたね

A black and white woodblock-style illustration of a woman from the waist up. She has her hair styled in a bun with a decorative clip. She is wearing a patterned kimono with a dark belt. She is holding a low rectangular tray with both hands; on the tray is a small, square-shaped box with a lid. The background is plain.

生の中のどんな怒り哀楽も阿弥陀院

今の人人生を本当に喜ぶには、生きていることの不安からの解決がなければなりません。このことを「生死出づべき道」を知ると言います。人生には、悲しみや苦しみが休みなく投げかけられます。逃げたくても逃げる私ではありません。親鸞さまは、苦悩の人生のままに、阿弥陀仏の願いの中に生きる道を選ばれました。親鸞さまの人生は、苦悩から離れたものはありません。人

生には、本当の心の落ち着き場所を知ることが大切です。浄土真宗では、そ  
の落ち着き場所が南無阿弥陀仏です。  
今の人生を本当に喜ぶには、生きてい

## おみがき

清掃奉仕

11月15日(土)  
午後3時叢会

☆境内除草  
☆仏具おみがき

報恩講まえの「お磨き・清掃」奉仕を行います  
ご都合のつく方はご参加ご協力ください。

勝林寺仏教青年会々長  
永井 孝一郎  
勝林寺仏教婦人会々長  
南 加寿子